

一調査台帳による16世紀ダマスクスのワクフとミルク

伊藤隆郎

I

前オスマン朝時代のシリアに関するワクフ設定文書は、現在知られている限り、少数しか伝存していない¹⁾。しかしシリアではアイユーブ朝、マムルーク朝時代に多くの地方史や地誌が著され、それらの中にモスク、マドラサ、病院などの宗教・公益施設の場所、設立者についてだけでなく、ときにはワクフ財源についても記述を見出すことができる。このような史料の残存状況を反映して、前オスマン朝時代シリアのワクフに関する従来の研究は、主に地方史や地誌に基づいて行われてきた²⁾。

今後さらに研究を進めていくためには、オスマン朝時代の史料、例えばワクフ調査の記録を含むことのある調査台帳 *tahrir defter*³⁾ を活用することが必要だと考えられる。この史料には、今では失われてしまったワクフ文書の概要が記載されているからである。パレスチナや特にエルサレムについては、ワクフ調査台帳を利用した前オスマン朝時代に関する研究が既に行われており⁴⁾、また校訂されている史料も若干ある⁵⁾。しかしながら、ダマスクス

-
- 1) エルサレムのハラム文書群の中に数点ワクフ設定文書がある [Little 1984]。同文書群の遺産目録 (wuqūf) 中のワクフ財は Lutfi 1985 が検討しており (菊池 1988 も参照)、Richards 2002 はコーラン学校の 781/1379 年付け収支簿 (no. 49) に関する研究と校訂である。最近、同文書群のワクフに関する様々な文書を検討した Müller 2008 も発表された。またベルリン国立図書館にアレppoのマムルークの一家系に関する文書の写しの集成があり (この文書集については Saghbini 2005 参照)、その中にもワクフ文書が5点あるという [Layish 2008: 288]。アレppoには私蔵の文書や写しもあるようだが [Garcin 1990; Salati 1994]、詳細は不明である。ケンブリッジ大学図書館にはダマスクスの一ワクフに関する認証文書の集成が所蔵されているという [Richards 1990]。さらに、カイロに所蔵される文書にもシリアに関するものがあるが、多くはない。
 - 2) 例えば三浦 1995 や谷口 2007 など。また、Frenkel 2009 では多くの碑文も参照されている。
 - 3) この史料群については Suraiya Faroqi, "tahrir", *EP*; BOA: 97-133; 今野 2007; Orbay 2007: 5-6 を参照のこと。*Tahrir defter* は多くの場合、租税台帳や検地帳と訳される。しかし、ここで扱うのはワクフとミルクに関する調査を記録したものであるため、調査台帳という訳を与えることにする。
 - 4) Burgoyne/ Richards 1987; Bakhit 1990; Bakhit 1994; 三浦 2004; Walker 2007 など。しかしオスマン朝史研究の中では調査台帳を利用した研究は数多くなされている。
 - 5) AMF は *tapu tahrir defter* no. 522 の校訂。この調査台帳は 10/16 世紀半ばに作成されたと考えられ、ガザ、エルサレム、サファド、ナーブルス、アジュルーン (Ağlūn) のワクフとミルクにノ

やアレppoなど他のシリアの都市・地域については、Winter 2004 を除けば、同様の研究はまだほとんどなく、史料の公刊も進んでいないようである。

こうした研究状況の中、オスマン朝支配下の 16 世紀に作成されたと思われるダマスクス県のワクフとミルク *milk* (私財) の調査台帳が最近、校訂出版されたのは歓迎されるべきことといえるであろう。本稿では、この史料を紹介し、その内容をいくつかの観点から分析することにした。

II

件の調査台帳は、イスタンブルにあるアタテュルク図書館の Muallim Cevdet Collection に属する⁶⁾。残念ながらアタテュルク図書館が閉鎖中で、まだ現物を確認できていない。そのため不確かな点がいくつかあることをあらかじめお断りしておきたい。

さて、この史料は Aydın Özkan によって校訂され、画像ファイルを収録した CD とともにイスラーム歴史・芸術・文化財団 (IRCICA) から出版された。ただし題名が間違っている。校訂者によれば“Fetihten Önce ve Fetihten Sonra Mısır Vakıfları” (征服前後のエジプトのワクフ) と、おそらく Muallim Cevdet によって名付けられていることから⁷⁾、*Mısır Vakıfları* (エジプトのワクフ) という題名がつけられている。しかし、内容を見れば明らかのように、エジプトではなく、主にダマスクス県 (liwā' aš-Šām) にあるワクフとミルクの調査台帳である⁸⁾。Özkan はエジプトのワクフの歴史などを序論で述べているが、さすがにおかしいと思ったのか、エジプトやカイロではなく、ダマスクスの町の地図 2 点を本書に添付している。

分類番号については、Özkan が 862 というのに対して、この調査台帳とほかに 4 点の調査台帳を利用してマムルーク朝スルタン、アミール、*awlād an-nās* (マムルークの子孫)

について記録している。同様の台帳 no. 312 も校訂されているらしい [Frenkel 2009: 149, n. 1]。SAQ はエルサレムのワクフとミルクに関して 970/1562 年に作成された *taḥqīq taḥrīr defter* no. 342 の校訂。その他、オスマン朝時代の法廷台帳 (sigillāt al-maḥākīm aš-šar'iyya) に記録されたワクフ文書などエルサレムに関する様々な文書史料を集めて校訂した WMT もある。Walker によれば、Muḥammad 'Adnān al-Baḥīt (Bakhit) は Nūfān Raḡā Hammūd と共同でアジュルーンの調査台帳 2 点を校訂し、さらに前者はダマスクス総督の *ḥaṣṣ* の調査台帳も校訂しているということであるが [Walker 2007: 175 n. 6]、筆者は未見。

6) Muallim Cevdet 蔵書の *defter* ということ、MCD と略する。

7) MCD: 3。しかし、どこにそのような書き込みがあるのかは明らかでない。

8) ダマスクス県の地理的範囲については Bakhit 1982 を参照のこと。しかし、MCD はエルサレム県 (liwā' al-Quds) などダマスクス州 (wilāyat aš-Šām) 内の他の県に属する村などについても言及することがある。ダマスクス州 (wilāyat aš-Šām) の範囲については Hütteroth/Abdulfattah 1977: 17 参照。

のワクフに関する研究を発表した Winter は 83: 936 としている [MCD: 3; Winter 2004: 297 n. 2]。また, Mandaville は 083 であるといい, さらにこれが総理府オスマン文書館蔵の *maliyeden müdever* (旧財務省移管帳簿) no. 247 の一部であると指摘する⁹⁾。付属の CD に収録されている画像を見ると, 第 1 葉表の左上に M. Cevdet Kütüphanesi という印の真ん中に 083 と書かれているのに気づく。またその右横に 1426 というアラビア文字数字も見える。この 1426 という数字は第 120 葉裏にも書かれており, 分類番号の一部を成すのではないかと思われるが, Mandaville をはじめ誰も言及していない。

葉数は, Özkan によれば, 全部で 121 ということであるが, CD の最後のコマには右側のページ, つまり第 120 葉の裏までしか写っておらず, 左側のページに何かが書かれているのか, 裏表紙なのかといったことは不明である。CD の画像を見ると, 各葉の左上に算用数字で 120 まで番号が振られていることがわかる。また, その数字の右上方にアラビア文字数字で, 第 1 葉の裏面を第 1 ページとする番号, つまりフォリオ番号ではなくページ番号が書かれていて, 最後は 239 である。ただし第 79 葉の表は白紙である。また, その裏と続く第 80 葉の表裏も白紙らしく, 第 79 葉の裏と第 80 葉の表を写したコマは CD に収められていない。Winter 2004 で挙げられているフォリオ番号から判断すると, 彼は第 80 葉あるいは第 79 葉を飛ばしているようである [Winter 2004: 304, n. 17; 308, n. 23; 312, n. 36]。しかし, アラビア文字数字のページ番号も第 80 葉があるかのように連続していることからすれば, 葉数は全部で 120 (ないしは 121) ではないかと思われる¹⁰⁾。

この調査台帳に記録されているのは全部で 443 件である。その内訳は, 見出しの記述に従えば, ワクフが 356 件, ミルクが 86 件となり, ミルクのうち後にワクフにされたと注記されているものが 5 件 [MCD: 13 a/ 123, 31 b/ 152, 95 a/ 235, 95 b/ 235, 97 b/ 237], ミルクかワクフか議論があるものが 3 件 [MCD: 44 a/ 172, 73 b/ 211, 112 b/ 258 - 259], 後に没収され国有地とされたものが 1 件 [MCD: 73 a/ 210] ある。そして, どちらか不明なものとしてダマスクスの城塞内の製粉場が 1 件である [MCD: 18 b/ 132]。

作成時期については, 台帳に記載がないため, 推測するほかない。オスマン朝はシリアを征服した当初から何度となく土地やワクフの調査を試みており, an-Nu'aymī も 923/ 1517 年にその著作 (DTM の草稿) を見せるようにいわれたが, ただマドラサの名前を記したりストだけ提出したという [MH: II, 36 - 37, 73; Bakhit 1982: 143; 三浦 1995: 27 - 28]。MCD には, Nūḥ Čelebī という人物の作成した台帳 (*defter*) に言及している箇所がいくつか見られる [MCD: 23 a/ 138; 26 a/ 144; 38 a/ 162; 44 a/ 172 etc.]。Nūḥ Čelebī/ar-

9) Mandaville 1969: 146. Winter も *maliyeden müdever* no. 247 に言及するが, MCD がその一部であるかどうかについては触れていない [Winter 2004: 297, n. 2]。

10) ちなみに第 66 葉の裏も白紙である。なお, 以下で MCD を参照する場合, 最初にフォリオ番号, 次いで校訂のページ番号を記すことにする。

Rūmī が *defterdār* として調査を行ったのは 923/1517 年および 930/1523-24 年のことである [MH: II, 61, 65, 72-73; Bakhit 1982: 143-144]。923 年の場合はワクフ調査の命令が出されてから 4 ヶ月足らずで Nūḥ ar-Rūmī が解雇されており、台帳が作成されたのかどうか疑わしい。ともあれ、MCD が作成されたのは、以下で述べる MCD 中に見られる年から、930 年よりも後であったと考えられる。また MCD には「*defter-i ġadīd-i ḥāqānī* に登録した (qayd olundu)」という記述も散見されるが [MCD: 11 b/120; 12 a/121; 16 a/128; 31 b/153 etc.]、この台帳がいつの時点で作成されたのかはわからない。

MCD の中で最も新しい年は、Zaynaddīn ‘Abdalqādir b. al-‘Adawī なる人物¹¹⁾が妻、その後は息子 Šihābaddīn Aḥmad、そしてその子孫を対象にして設定したワクフの 1 件に見られる。台帳によれば、このワクフ文書は 915/1509-10 年に作成されたことになっているが、3 つのワクフ財のうちの 1 つ、ダマスクス郊外 Masġid al-Qaṣab にある農園 (ġunayna?) が 991/1583-84 年に購入されたと書かれているように見える [MCD: 8 a/115]。この台帳では、ワクフ文書が作成された後に追加された物件もこのように書き加えられていることがある。したがって、ワクフ物件の購入年が文書の作成年よりも後になっていることは、それほど問題ではない。しかしながら、MCD の中に見られる他の年と比べると、991 年というのは際立って新しく、誤記の可能性が高い。あるいは、このワクフの別の財は 891/1486 年に購入されたということなので、本来 891 年と書かれたが、百位の数字 8 がかすれて 9 に見えるようになったのかもしれない。

次に新しい年は、マムルーク朝初期のアミールでダマスクス総督を務めた Sunqur al-Aṣqar (d. 691/1292)¹²⁾ が子孫に対して設定したワクフについてオスマン語で説明されているところに見られる。それによれば、988/1580-81 年にワクフ文書が作成されたとなっているが、その上では 688/1289-90 年となっており [MCD: 67 a/202]、明らかに後者が正しいので、百位の数字が誤って書かれたと考えられる。

その次は、Rabī‘a bt. aṣ-Šayḥ Yūnus という女性が息子 Naṣīraddīn Muḥammad b. aṣ-Šayḥ ‘Alī al-Bayṭār、さらにその子孫を対象に設定したワクフの物件の最初の (?) 購入年 (ta’riḥ aṣl muštari) として挙げられている 961/1553-54 年である。ここにはほかに購入年として 928/1521-22 年が挙げられ、ワクフ文書は 929/1522-23 年に作成されたと記載されている [MCD: 37 b/161]。これも何らかの誤記であった疑いがある。

11) この人物 Zaynaddīn ‘Abdalqādir b. ‘Uṣmān b. Šihābaddīn al-‘Adawī の別のワクフの文書は 887/1482-83 年に作成されている [MCD: 7 b/114]。彼は、ザンギー朝の Nūraddīn (d. 569/1174) が建設したヌーリー病院 al-Māristān an-Nūrī の職員であった az-Zaynī ‘Abdalqādir al-‘Adawī のことかもしれない [MH: I, 113, 233]。

12) 彼については TKW: 85-86 (no. 127); IW: 7-8 参照。TKW によれば彼が処刑されたのは 692 年ということであるが、おそらくは 691 年中のことであったと思われる [ZF: 290-291]。

確実なのは 936/1529-30 年で、この年は 11 箇所で見られ、そのうち月日まで明記された最も新しい日付は同年 *Dū l-qa'da* 月 12 日 / 1530 年 7 月 8 日 [MCD: 49 a/179] である。Mandaville がいうように MCD が *maliyeden müddever* no. 247 の一部だとすると、936 年が *maliyeden müddever* no. 247 の作成年ということなので、MCD もこの年に作成されたことになる。とにかく 936 年末以降であることは間違いない。なお、Winter は MCD の作成を 950/1543-44 年頃と推測しているようであるが、特にその根拠は挙げられていない [Winter 2004: 298]。

III

それでは、この調査台帳 MCD の内容をいくつかの観点からもう少し詳しく見てみることにしよう。

各件は、まず見出し（ワクフかミルクか）が書かれ、2 行目以降にアラビア語でワクフならばその設定者か受益者または対象施設の名前、ミルクならばその所有者の名前が記された後、ワクフの場合は続けてワクフの条件、すなわち対象・目的が何であるか、収益をどのように分配するかが述べられ、最後に物件の購入やワクフ文書作成の年などが書かれる。そして、そこから少し離れた下にワクフ財またはミルク財が 2 列または 3 列で列挙され、オスマン語によって、例えばワクフである旨、証言がなされ確定したといったことが説明される。また 11 件のワクフでは、その下にさらに支出の細目が挙げられている。なお、同一人物のワクフやミルクはある程度まとまって記録されている。

校訂者 Özkan は、最初のアラビア語の部分、つまり見出しからワクフの条件まではアラビア文字で翻刻し、その他はローマ字転写を用いている。校訂は概ね正確であるが、特にローマ字転写の部分に誤りが散見されるので、CD 収録の画像を対照して参照する必要がある。

1 時期分布

MCD 中で最も古い年は、573/1177-78 年である。これは、Fāṭima bt. Ḥusāmaddīn Abi Sa'īd KWKY/KWKĜY (?) という女性がダマスクス市内にある、おそらくは彼女自身のマドラサに対して設定したワクフの文書が作成された年である [MCD: 71 a/208]。ただし、このマドラサが Ibn Šaddād や an-Nu'aymī の記すマドラサと同じであるとしたら——彼らによれば建設者の名前は (Hātūn bt.) ḤṬBLSY/ḤṬBLŠY/ḤṬBLĜY (Hātūn) bt. KKĜ'——、それは 593/1196-97 年に建設されたという [AH: 212-213; DTM: I, 565-569; II, 168]。ワクフ文書の作成年と施設の開設年は異なることがあるが、MCD の書記が 90 を 70 と書き写し間違ったか、逆に Ibn Šaddād と an-Nu'aymī (あるいは校訂者) が 70 を 90 と誤ったのかもしれない。

Hānqāh al-Qaṣr は、Ibn Šaddād や an-Nu‘aymi によれば、529/1134–35 年以前に建設されたことになっているが [AH: 192; DTM: II, 167–168], MCD に記載されているワクフ財がいつ設定されたのかは不明である [MCD: 118 b/266]。しかし下の表では、600/1203–04 年以前に設定されたものとして勘定している。

また、殉教者の故スルタン Nūraddīn の母 ‘Y’RĜ (?) Zumurrud (‘Y’RĜ Zumurrud umm al-marḥūm as-sultān Nūraddīn aš-šahīd) という女性がシャイフ Abū l-Ḥusayn b. Abī ‘Abdallāh b. Ḥamza aš-Šūfi にダマスクス郊外の Masġid al-Qadam にある 4 片の土地をワクフにしており、そのワクフ文書の登録 (siġill) は 829/1425–26 年であった [MCD: 16 a/128]。この女性は、おそらく Nūraddīn の実母ではないが、父 Zangī の妻となった Šafwat al-Mulūk Zumurrud Ḥātūn (d. 557/1161–62)¹³⁾ のことではないかと思われる。そのため、下の表では 600 年以前のワクフとしている。

ミルクでは、al-Ġamālī Abū Sa‘īd Aqquṣ b. ‘Abdallāh al-Manṣūri が Ġubbat ‘Assāl にある村の一部を購入した 704 年 Šafar 月 / 1304 年 9 月が最も古い [MCD: 112 b/258–259]。ただしこの物件は、al-Ġamālī Abū Sa‘īd Aqquṣ の子孫のミルクか別人のワクフかで議論のあることが注記されている。表では 704 年にミルクとされたものとしている。なお、表中の括弧内の数字は、このようにミルクかワクフか議論のあるもの、またはミルクから後にワクフとされたもの、後に没収されたものの件数である。

次に古いのが、807/1404–05 年のミルク文書 (milkiyya) の年である。ここには Ismā‘īl b. ‘Abdalqādir b. Badraddīn という人物とその兄弟 Muḥammad, 従兄弟の Badraddīn と Taġaddīn らが父祖から受け継いだということで、3 つの財が挙がっているが、うち 1 つは 873/1468–69 年、もう 1 つは 936/1529–30 年に購入されたとの書き込みがある [MCD: 87 b/226]。おそらく右端に記されている土地が 807 年以前に購入されてミルクとされ、その後これを相続した子孫が新たに 2 つの財をそれぞれ 873 年と 936 年に買い足したということではないかと思われる。表では、807 年のミルクとしている。

ワクフとミルクに分けてヒジュラ暦の 50 年毎に年代の分布を示したのが下の表である。MCD に年が記載されておらず、いつ頃なのか特定できないものが全部で 48 件あり、それらは除外した。その他 Hānqāh al-Qaṣr のように MCD に年代が記されていないものがあるが、それらはワクフ設定者の没年や施設の建設年を採用した。また、Zumurrud の場合のほかにもワクフ設定文書やミルク文書ではなく、代わりに法廷記録 (maḥḍar), 確定 (ṭubūt), 登録, 購入などの年が記載されているものも結構あるが、それらもワクフやミルクが設定された年とした。したがって、表中の件数は正確なものではなく、大体の傾向を示しているだけである。

13) 彼女については DTM: I, 502–504 参照。

	- 600	601-650	651-700	701-750	751-800	801-850	851-900	901-
<i>waqf</i>	7	12	14	14	12	55	113	94
<i>milk</i>	-	-	-	1 (1)	-	6 (2)	22 (3)	45 (2)

一見して明らかのように、ミルクは801/1398-99年以降、年代が新しくなるにつれて増えている。これは当然ともいえる結果だが、851/1447-48年から900/1494-95年という年代のミルクが22——のちにワクフにされたもの等を除けば19——件と相当数あるのが目を引く。ミルクをワクフにする理由として、相続法による財産の細分化を避けること、また没収されにくくなり、より確実に財産を残せることが一般に挙げられる。しかしこの結果から、それでも所有する不動産を必ずしもワクフにするわけではなく、比較的長い間ミルクのままにしておくこともあったのがわかる¹⁴⁾。

ワクフも851年以降で件数が大きく増えているが、その一方、800/1397-98年以前のワクフも少なくない。601/1204-05年以降800/1397-98年までの50年毎の件数は12-14件とほぼ同じで推移しており、600年以前に設定されたと思われるワクフも7件ある。後に触れるが、MCDに挙げられていないワクフ対象施設が結構あるので、古いワクフはもっと多かったのではないかとも思われる。しかし、原則としては永遠のワクフも実際には没収されたり、売却されたりして消滅することもしばしばであった [三浦 1995; 谷口 2005]。また、MCDが少なくとも部分的にはワクフ文書を転載しているだけの可能性もあり、実際にすべてのワクフが記載通りだったかどうかは疑わしい。それでも、ミルクと比べれば、ワクフはやはり長く継続するものであったとはいえるであろう。

2 ワクフ財とミルク財

ワクフ財あるいはミルク財として登録されているものの数は全体平均で1件当たり4.22、ワクフだけだと4.76、ミルクだけだと1.99となる。比較のためにいえば、AMFではワクフとミルクを合わせた場合の1件当たりの登録数は3.07、ワクフのみで3.82、ミルクのみで1.17である [AMF:1 (解題 p.12)]。

MCDでの最多は、ワクフの場合、Qāḍī Muḥibbaddīnという人物が921/1515-16年に51の物件をまず自分自身を受益者とし、その後2/3を息子の子2人(waladay walad)つまり孫2人とその子孫に、1/3を娘1人に分配するように設定したものである [MCD: 60 a-61 a/194-195]。この人物はまた、906/1500-01年に4つの物件をワクフにしており、その最初の受益者は息子と娘、その後は半分をメッカ・メディナ両聖都、残り半分をヘブロン

14) ガージャール朝期イランのことであるが、私有財産のごく一部のみがワクフにされた例もある [近藤 2001: 224]。

のアブラハム廟に分配するように取り決めている。ミルクの場合は、Šihābaddīn Aḥmad b. Taqiaddīn Abī Bakr al-Baġdādī なる者の名前で、何年かにまたがっているが、全体は 932/1525-26 年に購入されたものとして記録されている 15 が物件数では最多である。彼はさらに互いに隣接する公衆浴場, *hān*, 店舗 (*dakākin*, sg. *dukkān*) の 3 つの物件を同じ 932 年に購入している [MCD: 16 b-17 a/128-129]。しかし、191 件で記載されているワクフ財あるいはミルク財が 1 つのみであり、全体としては小規模なものが多いといえるであろう。

財の種類は、村 (*qarya*)、枝村ないし耕作地 (*mazra'a*)、土地片 (*arḍ*, *qiṭa'at arḍ*)、農園 (*bustān*, *ġunayna*)、果樹 (*ġirās*) などのダマスクス近郊にある農業関係資産が目立って多い。製粉場 (*tāḥūn*) も多数ワクフ財やミルク財となっている。一方、家屋や店舗、浴場などの都市内不動産がさほど見られない¹⁵⁾。AMF でも農業関係資産が多いが、都市内不動産の割合はこれほど小さくはない。これは、MCD のもとになった調査が土地を中心になされたからか、徹底したものではなかったからではないかと考えられる。あるいは、MCD が記録しているのが調査結果の一部ないしは要約である——Mandaville が正しいとする——と MCD はそもそも台帳の一部である——可能性があり、その影響もあるかもしれない。

3 ワクフ設定者とミルク所有者

アイユーブ家では、Šalāḥaddīn (d. 589/1193) が、シャイフ Zaynaddīn Abū as-Sa'ādāt b. al-Baṭā'iḥī という人物とその子孫に対して Banū Mālik (?)¹⁶⁾ にある土地片 (*qiṭa'at arḍ*) を 583/1187-88 年にワクフとしている [MCD: 38 b/163]。

また、ダマスクスの支配者となった al-Ašraf Mūsā (d. 635/1237)¹⁷⁾ がダマスクス郊外の Šaliḥiyya に建造したハディース学院 (*dār al-ḥadiṭ*) [DTM: I, 47-55; QG: 155-164] に対するワクフがある [MCD: 115 b/263]。このハディース学院のワクフ財として、MCD には Biqā' の 2 つの村 (*qarya*) と 2 つの枝村 (*mazra'a*) が記載されているのに対して、DTM および QG には Biqā' の 5 つの私領地 (*ḍiyā'*, sg. *ḍay'a*)¹⁸⁾ に加え、家屋 (*bayt*)、農園 (*ġunayna*)、賃貸地 (*ḥikr*) 各 1 つずつが挙げられている。DTM と QG の記述が正

15) Özkan は各ワクフとミルクの物件を列挙したリストを作成しているが [MCD: 50-67]、家屋 (*bayt*) を村 (*qarya*) と読み間違えているような箇所が散見される (例えば MCD: 7 b/114)。そのためこのリストは参考程度に留めるべきであるが、それを見ても村、枝村、土地が圧倒的に多い。

16) ダマスクス県内には Banū Mālik Ašraf と Banū Mālik aṣ-Šadīr という 2 つの区 (*nāḥiya*) があるが [Bakhit 1982: 84, 87]、そのどちらかを指すのか、または別の地域なのかは不明。

17) 彼については Humphreys 1977: *passim* (Index を見よ) を参照のこと。

18) 村や枝村、私領地と呼び方は違うが、MCD 中の 2 つの村と 2 つの枝村は、DTM と QG の挙げる 5 つの私領地のうちの 4 つに一致する。

しく、古い時期を反映しているとするなら、それ以後 MCD のもとになった調査が行われたときまでの間に MCD にないワクフ財が失われてしまったのか、MCD の記載が正確ではないということになるであろう。もし MCD の方が古い状態を正しく記録しているなら —— DTM は an-Nu'aymi 没後の情報を含んでいる可能性がある [三浦 1995: 27-28] ——, DTM と QG は当時の状態を述べているのではなく、おそらくは当初のワクフ財を列挙しているであろう。

ほかにアイユーブ家のメンバーでは、Sāra Ḥātūn bt. al-Malik al-Mu'azzam (Īsā?) という女性が Šāliḥiyya にある自身の墓廟とモスクに対してダマスクス郊外の Ġūṭa にある 2 つの農園 (bustān) と Iqlīm al-Billān の村の一部をワクフにしている [MCD: 100 b/241]。

また、Sitt aš-Šām Zumurrud Ḥātūn bint Nağmaddīn Ayyūb (d. 616/1220)¹⁹⁾ がダマスクス市内に建設させた al-Madrasa aš-Šāmiyya [DTM: 301-313; Humphreys 1994: 48] のワクフとして Ġūṭa にある Ġarmānā という枝村の一部が記載されている [MCD: 67 b/203]。このマドラサには当初もっと多くのワクフ財が設定されていたが [FS: II, 118-119; DTM: 301-302; RCEA: XI, 15], MCD の記述が正しいとすれば、この間に 1 枝村を除いて失われてしまったことになる。

アイユーブ家の成員たちはダマスクスに宗教・教育施設を数多く建造したことが知られているが、MCD には叙述史料などからこれまでに得られなかった情報 (Šalāhaddīn と Sāra Ḥātūn のワクフ) が見られるものの、ごく僅かしか彼らのワクフが記録されていないといえる。MCD の記録していないワクフが、その作成時点までに荒廃または消滅していたことも考えられるが、すべてがそうだったとは思われない²⁰⁾。

マムルーク朝のスルタンでは 4 人の名前が見られる。Baraka (Berke) Ḥān (d. 678/1280) が父 Baybars (d. 676/1277) の名で建造させたダマスクスのマドラサ al-Madrasa aḡ-Zāhiriyya [DTM: I, 348-359] については、MCD で 13 のワクフ財が挙げられており、このうち 2 つはワクフ文書に記載がなく、碑文を見たとの注記がある [MCD: 76 b/214-215]。たしかにこの 2 物件 (ダマスクス近郊 Marg がある村/枝村 Ṣaḥyā の一部と Biqā' がある村/枝村 al-Iṣṭabl の一部) は、後におそらくは Qalāwūn (d. 689/1290) が追加し、碑文に刻ませたワクフ財の中に見い出せる。しかし、このとき (686/1287-88 年のこととされる) さらに 3 つのワクフ財も追加されており [RCEA: XIII, 57-58; Leiser 1984: 53-54], それらが MCD には抜けている。このマドラサには別に 676/1277-78 年の碑文があり、そこに 13 の物件が挙げられている [RCEA: XII, 229-230; Leiser 1984: 46-47]。追

19) 彼女については Humphreys 1994: 47-48 を参照のこと。

20) アイユーブ家のメンバーがダマスクスに建造し、現存しているマドラサはいくつもある [三浦 1995: 表 2]。

加された2物件は無論ないが、MCDに記載されている枝村とは別の村が挙げられており、Bustān as-Sabtiyya (?), 店舗 (ḥānūt), ḥān, qaysāriyyaの一部というMCDには見られない4つの物件が言及されている。MCDとこの碑文で一致するのは10の物件である²¹⁾。また、このマドラサのワクフ文書を抄録した叙述史料がTMZ, DMZ, Ibn Šākir al-Kutubī (d. 764/1363)の‘Uyūn at-tawāriḥの3点ある²²⁾。それらによれば、676年末にワクフが設定された後、677年に追加がなされたという [TMZ: 226-230; DMZ: III, 247-249; Leiser 1984: 40-46]。676年には12物件、677年には1物件がワクフとされ、それらのうち店舗、Bustān as-Sabtiyya (?), 浴場、賃貸地にあるḥānの4つはMCDに見られないが、その他は686(?)年の追加2物件を除いてほぼ同じである。叙述史料と676年の碑文を比べると、物件数は同じであり、村の名前が1つ異なっているほかに、叙述史料で浴場が挙がっているのに対して碑文ではqaysāriyyaが挙がっているという違いはあるが、その他はほぼ一致している。677年に追加された1物件も見られるので、Leiserが推測する通り、この碑文中の676年という年は最初のワクフ設定か、建設工事の始まりを示すのであろう [Leiser 1984: 46]。一方DTMには、al-Madrasa aḡ-Ḍāhiriyyaのワクフ財として7物件が挙げられている [DTM: I, 358; Leiser 1984: 54-55]。このうち3、ないしはDTMでŠāliḥiyyaにあるとされる農園を加えれば4の物件がMCD、676年の碑文、叙述史料とも共通であり、1つは後に追加された村/枝村 al-Isṭablの一部でMCDと686(?)年の碑文にも挙げられているが、残り2つの村は他史料に見られない。以上をまとめれば、叙述史料と676年の碑文が、若干の違いはあるにせよ、Baraka Ḥānの命によって設定されたワクフ財すべてを挙げており、686(?)年の碑文が追加分を網羅していると考えられる。その後これらのワクフ財は変化を被り²³⁾、MCDが記録しているのは調査時点の状況かもしれない。ただし、DTMの記述との違いが大きく、MCDが正確に当時の状態を反映しているかどうかは決定できない。

An-Nāṣir Muḥammad (d. 741/1341)は、Šāliḥiyyaにあるスーフィーのシャイフ Nağ-maddīn as-Suyūfiのザーウィヤ [DTM: II, 202; QG: 288]のためにワクフを設定している [MCD: 104 a-b/245]。MCDにはワクフ財としてダマスカス近郊の Fiḡa/‘Ayn al-

21) MCDで個別に挙げられている3つの農園が、碑文ではまとめて1つとして記載されているものに相当するという前提に立つ。それらを碑文と同様にまとめれば、MCDに記載される物件数は11、碑文と一致するのは8となる。ただし、一致するといっても、名前や場所、ワクフ財の占める割合(ある物件の1/2とか)などで違いがあり、同定できるかどうか確実ではないものもある。このal-Madrasa aḡ-Ḍāhiriyyaのワクフ財については、以下も同様である。

22) このうち‘Uyūn at-tawāriḥはここでは利用できなかったが、Leiser 1984がDMZと‘Uyūnとを校合し、TMZの校訂の原稿も参照してテキストを作成している。

23) ダマスカス総督のTankiz (d. 740/1340) —— 彼については後に触れる —— がḥānの1つを買い取ったという [Leiser 1984: 55]。

Fiġa という村が挙げられているだけであるが、DTM と QG にはもう 1 つ Dayr Muqarrin という村も挙げられている。後者は MCD 作成の時点までにこのワクフから失われてしまったのかもしれない。

Barqūq (d. 801/1399) の場合は、これは MCD では珍しい例であるが²⁴⁾、カイロにある対象施設、すなわち彼が建造したマドラサに対するシリアのワクフ財が載っている [MCD: 57 b-58 a/189-190]。MCD には、ワクフ文書は 788 年に作成されと書かれ、10 のワクフ財が記載されている。このうち 8 つは、現存する 788/1386 年のワクフ設定文書に登録されているものに比定することができる²⁵⁾。しかし残り 2 つのうちの 1 つ、ダマスクス郊外 Qārā の店舗は後に追加されたもので [五十嵐 2004: 42, no. 1]、ダマスクスの Bāb as-Salām の内側にあったとされる製粉場 (ṭāḥūn) はいつ誰によってワクフにされたのかは不明である。なお、このマドラサのワクフ財がさらにアジュルーンのĠawr に 3 つあったことが他の調査台帳からわかるが [AMF: 53, 94]、これらもワクフにされた経緯は明らかでない。

Ḥuṣqadam (d. 872/1467) は、868/1463-64 年にダマスクスの at-Turba al-Waġiziyya という施設に対して 9 の村と 3 の枝村をワクフにしている [MCD: 4 b/109-110]。この at-Turba al-Waġiziyya というのは、コーラン学校 Dār al-Qur'ān al-Waġihiyya [DTM: I, 17-18] である可能性が考えられるが、いずれにせよ Ḥuṣqadam のこのワクフについては、管見の限り他史料に見い出せない。

他の調査台帳も参照した Winter によれば、さらに数人のスルタンが、それぞれ規模は大きくないようだが、ダマスクスの施設にワクフ設定を行っているという [Winter 2004: 301-302]。従来知られている以上に多くのスルタンたちがダマスクスで、小規模なものとはいえ、ワクフを設定していたといえるであろう。

マムルーク朝のアミールでは、さきに触れた Sunqur al-Aṣqar をはじめ、ダマスクスで何らかの官職に就いた者がやはり多いようである。910-911/1505-06 年にダマスクス総督を務めた Arikmās は、917/1511-12 年に自身、その後はおそらくダマスクスにあったと思われる彼の墓廟および子孫に対して 12 の物件をワクフにした [MCD: 85 b/223-224]。彼の後任でダマスクス総督となった Sibāy (r. 911-922/1506-16) も、916/1510-11 年に as-Sayyid Ṣihābaddin b. as-Sayyid Taġaddīn al-Ḥusaynī ar-Rifā'ī という人物とその子孫に対するワクフとして 2 つの物件 [MCD: 93 b/233]、922/1516 年には自身と子孫、

24) 他にカイロにある施設として 'Alā'addin b. an-Nāṣirī Muḥammad b. Ṭāṣbugā という人物の墓廟 [MCD: 61 a/196]、スルタン al-Manṣūr Laġīn (d. 698/1299) の腹心 Mankūtāmūr (d. 698/1299) の墓廟 (マドラサ) [MCD: 105 a-b/247] の 2 例がある。

25) ワクフ設定文書 (カイロの Dār al-Waṭā'iḳ al-Qawmiyya 所蔵 no. 9/51; この文書の内容に関しては五十嵐 2004 参照) では 6 つの村または土地 (ḳay'a ḥarāġiyya) が挙げられているが、MCD ではこのうち 2 つの村に付属する枝村/耕作地 (mazra'a) をさらに挙げている。

解放奴隷などに対するワクフとして 18 物件 [MCD: 52 a-b/ 182-183] をそれぞれ設定している²⁶⁾。

ダマスクスの大ハージブ (ḥāḡib al-ḥuḡḡāb) などを務めた Balabān al-Maḥmūdī (d. 836/ 1433)²⁷⁾ は、835/ 1431-32 年にワクフを設定し、その収益はまずダマスクス郊外の自身の墓廟 [DTM: II, 231-232; QG: 310-311] と水道施設 (sabil) の運営に回し、余剰分は自分自身、その子孫のものになるようにした [MCD: 88 a-b/ 227-228]。DTM や QG によれば、Balabān al-Maḥmūdī は墓廟の近くに家を建てたということであるが、それが MCD ではワクフ財に挙がっている。また DTM と QG は、彼が maṣna' ḡabāḡiba (?) を整備し ('amara), それに対してスルタンから購入した村の半分をワクフにしたというが、これはおそらく MCD でいう水道施設のことを意味すると思われる。MCD にはワクフ財としてダマスクス郊外の Iqlīm Zabīb にある村の半分 (12 qīrāt) が挙がっている。その他、MCD によれば、店舗 (dakākin), qaysāriyya, Marḡ にある枝村の一部の 3 つの物件がワクフ財であった。

このほかにもマムルーク朝のアミールが何人か見られるが、an-Nāṣir Muḥammad の第三治世期 (709-741/ 1310-41 年) に長らくダマスクス総督を務め、建築活動を活発に行った Tankiz²⁸⁾ が見当たらない。彼は最後は処刑され、その財産は没収されたが、ワクフ財、少なくともそのすべては没収の対象とならなかったはずである。彼のエルサレムのマドラサは現存し、そのワクフ財もオスマン朝時代の調査台帳などに記録されており [Burgoyne/Richards 1987: 223-239; 三浦 2004: 154-165; AMF: 38], ダマスクスの集会モスクやコーラン・ハディース学院 [DTM: II, 425-426; I, 123-127] も部分的にせよ現存している。しかし Winter によれば、彼の名前は他のダマスクスの調査台帳にも見られないようである [Winter 2004: 302]。なぜなのかは不明である。

マムルークの子孫の名前も複数見られる²⁹⁾。中でも目立つのは Maṅḡak 家のメンバーである。この家系は、エジプトのワズィール職やダマスクス総督職などを歴任した有力アミール Maṅḡak al-Yūsufī (d. 776/ 1374)³⁰⁾ に遡り、16 世紀末になってもシリアで権勢を振るっていた [Bakhit 1982: 189-190]。MCD は、Maṅḡak al-Yūsufī の孫 Nāṣiraddin Muḥammad b. Ibrāhīm b. Maṅḡak (d. 844/ 1440) が設定したワクフ³¹⁾ のうち 3 件を記録

26) Arikmās と Sibāy については IW: *passim* (索引を見よ) を参照のこと。

27) 彼については DTM: II, 231-232; QG: 310-311; DL: III, 19 を参照のこと。DTM では、ニสบが al-Ḥamawī となっているが、おそらく al-Maḥmūdī の間違いであろう。

28) 彼については、S. Conermann, "Tankiz", *EP* 参照。

29) ワクフを設定したマムルーク朝のアミールやマムルークの子孫たちについては Winter 2004: 304-308 も参照のこと。

30) 彼については例えば、Burgoyne/Richards 1987: 385-386; IW: 22-24 参照。

31) 彼については DL: VI, 281 を参照。彼は MCD に記録されている以外にも多くのワクフを設定したようである [DTM: II, 106]。

している [MCD: 8 b-9 b/ 115-117]。その1つは、彼自身がダマスクス郊外の *Maydān al-Ḥaṣā* に建設した集会モスク [DTM: II, 444-445] とそれに付設されたコーラン学校 (*maktab*) に対するワクフで 830/1426-27 年に設定されており、もう1つはダマスクス郊外 *Masğid al-Qaṣab* にある彼が建て直したモスク [DTM: II, 430, 106] を主対象とするもの (832/1428-29年)、最後の1つは息子とその子孫に対するもの (832/1428-29年) である。その他、*Maṅgak* あるいは *Ibn Maṅgak* の名義で3件のワクフが見られる [MCD: 10 a-b/ 118-119]。これらのワクフ財の大部分はダマスクス周辺、バアラバック、シドン (*Ṣaidā*)、アッカーなどの村、枝村であるが、店舗や製粉場、浴場などもいくつか含まれている。また、系譜上の位置づけは不明だが、この家系に属すると思われる *‘Umar b. Muḥammad b. Sa’daddīn b. Maṅgak* なる人物が、871/1466-67年に自身、その後は妻と子孫、または解放奴隷たちなどを対象とするワクフを設定している [MCD: 68 b/ 204]。

ウラマーの有力家系のメンバーも見られる。*Al-Furfūr/al-Farfūr* 家は、マムルーク朝末期のダマスクスで *Šihābaddīn Aḥmad* と *Waliaddīn Muḥammad* という父子が30年以上にわたってシャーフィイー派大カーディーを務めたほか、*Šihābaddīn Aḥmad* の甥 *Badraddīn* はハナフィー派大カーディーになった³²⁾。その *Šihābaddīn Aḥmad* の兄弟である *Muḥibbaddīn b. Šarafaddīn b. al-Furfūr* の名前で6件のワクフ [MCD: 52 b-53 b, 55 a, 55 b-56 a/ 183-187] と3件のミルク [MCD: 55 b/ 187] が記載されている。ワクフの最初の対象はほとんど家族や親族である。またワクフ財やミルク財は、ワクフとされたシドン近郊の村にある浴場を除いて、ダマスクス周辺やシドンの村、枝村、土地といった農業関係資産から成っている。*Muḥibbaddīn* は軍務庁 (*diwān al-ğayš*) で働いていたこと [MH: I, 28, 38] 以外、詳しい経歴は不明であるが、兄弟の *Šihābaddīn Aḥmad* や甥 *Waliaddīn Muḥammad* 同様、資産家であったことが窺われる。その他、*Šarafaddīn b. al-Furfūr* なる人物のワクフが見られるが、ワクフ文書の作成年が766/1364-65年となっており [MCD: 53 b/ 184]、もしこれが正しいとすると、*al-Furfūr* 家の随分前の世代の者なのか、もしくは別の家系の者であった可能性もある。888/1483-84年に、後に触れるダシーシャ (*dašīša*) のためのワクフを設定した *Ibrāhīm b. Yūnus al-Furfūr* [MCD: 16 a/ 127-128] も系譜上の位置づけが不明である。

オスマン朝君主では、*Sulaymān (Süleyman) I* (d. 974/1566) が929年Šafar月上旬/1522年12月下旬にシャイフ *Aḥmad b. Ḥusayn al-Ḥinnāwī* (?) に対して枝村1つをワクフとした1件のみ記載がある [MCD: 46 a/ 175]。また、オスマン朝のダマスクス総督 *Farhād Bāšā* (d. 929/1523)³³⁾ の *kethūda* だった *Ġa’far Bak* という名前で2件のワクフ

32) この家系については Mandaville 1969: esp. 123-124; 三浦 1989 a: 5-8 参照。

33) 彼については IW: 238-240 を参照。

と1件のミルク——ワクフ財は2件合わせて土地 (arḍ) や製粉場など33物件、ミルク財はダマスカスの Bāb as-Salām 外にある製粉場と Marg にある村それぞれの一部という2物件——が登録されており [MCD: 48 a-49 a/ 177-179]、彼がかなりの財産を持っていたことが窺われるが、ほかに明らかにオスマン朝政府関係者とわかる人物は見当たらない。このことは、MCDのもとになった調査がオスマン朝のシリア征服後それほど時間が経っていない時点でなされたものだったことを示唆するように思われる。そうであれば、MCDが936年末あるいはそれからほどなくして作成されたのではないかと推測される。

女性については、356件のワクフ（設定者不明25件含む）のうち40/41件で³⁴⁾、割合にして11.2/11.5%を女性が設定しており、男性親族または夫と共同設定したのが5件で、合計で12.6/12.9%となる。なお、Fāṭima bt. Abī Bakr b. Qamaraddīn ar-Rab' という女性はかなりの資産家だったらしく、862-925/1457-1519年の間に——長い期間なので、彼女がすべての設定者だったかどうか疑いがあるが——15の村や枝村などの物件を自分自身と親族に対する3件のワクフとしている [MCD: 72 a-b/ 209-210]。

ミルクの所有者として女性の名前が見られるのは6件あり、全ミルク86件に占める割合は約7.0%である。なお、このうち1件は3人の女性親戚による共同所有で後にワクフになっており、別の1件は母娘による共同所有である。このほかに兄弟と共同所有しているものが5件あり、それを加えれば12.8%のミルクに女性が関与していることになる。

ワクフ財、ミルク財ともに男性の場合と有意な差異は認められず、村や枝村、土地などがほとんどである。後述のワクフの対象・目的についても、男女間で大きな違いは見られない。

4 ワクフ対象・目的

ワクフの対象・目的の大多数は設定者自身やその家族・親族であり、276件で言及されている。しかし、それらと共に、あるいは最終的な受益者としてメッカ・メディナ両聖都（ハラマイン *Haramayn*）³⁵⁾ やそこの貧者、滞在者などが指名されることが多く、そのようなワクフは110件ある³⁶⁾。オスマン朝時代にはハラマインをはじめエルサレム、ヘブロンなどに対するワクフは非課税だった [Bakhit 1982: 147-148]。そのためか、オスマン朝時代に設定されたことの確実なワクフ39件のうち19件でハラマインが、さらに4件でメディナが対

34) うち1件はそもそも女性が建設したマドラサに対するワクフであるが、このマドラサが一度崩壊した後に別の場所に建て直されたということで [QG: 217-218; DTM: I, 604]、MCDに記録されているワクフ財が本来のものであるかどうかはわからない [MCD: 117 b/ 265]。そのため、これを加えれば41件、加えなければ40件となる。

35) *Haramayn* という語は、エルサレムとヘブロンを意味することもあるが、ここでは、MCD中に特に注記がある場合を除いて、メッカとメディナを指すものと理解している。

36) ハラマインとしてまとめてではなく、個別に分配するように規定しているものも4件あるが [MCD: 61 b/ 196; 71 b/ 208; 74 b-75 a/ 212-213; 85 a/ 223]、これらも加算している。

象・目的として挙げられている³⁷⁾。前オスマン朝時代がどうであったかは不明であるが、もし同様に非課税であったとすれば、このことがハラマイン指名の多さの要因の一つであったと思われる。また特にメディナは人気があったらしく、24件のワクフでメッカとは別に挙げられているのに対し、逆にメディナに言及せずメッカのみを挙げるのは3件だけ [MCD: 3 a/ 107; 77 b/ 216; 84 a/ 221-222] である。メディナには預言者ムハンマドの廟があり、マムルーク朝時代におけるムハンマド崇拝の隆盛がこのような差に関係しているのかもしれない³⁸⁾。なお、エルサレムとヘブロン双方（両都市内の施設などである場合を含む）を挙げているものが3件 [MCD: 5 a/ 110-111; 52 a/ 182; 71 b/ 208], エルサレム単独でヘブロンへの言及がないもの1件 [MCD: 100 a/ 240], ヘブロン単独4件 [MCD: 59 a/ 191-192; 61 a/ 195; 68 b/ 204; 111 a/ 255-256] である。

ダシーシャとは、小麦粉に油脂を混ぜた（ときには肉が入ることもあったようであるが）粥のような食事のことで、それを貧者などに供することを定めたワクフが19件見られる。そのうち1件はメディナで、もう1件はメッカでダシーシャを提供するようにとされており [MCD: 20 a/ 133-134; 77 b/ 216], 残り17件のうち6件がダマスカス市内の Bāb al-Barīd の傍らで、2件が Šāliḥiyya にある Madrasat Abī 'Umar/ al-Marāsa al-'Umariyya で、1件がシリア (aš-Šām) でダシーシャを作り分配されることと定められている。8件については、どこでダシーシャを供したのかは不明であるが、おそらく Bāb al-Barīd ではなかったかと思われる。

これら以外にワクフ対象・目的として指定されているのはほとんどダマスカスおよびその近郊に存在する施設であった。Al-Ġāmi' al-Umawī, あるいはそのムアッズィン, イマームなどの職員を受益者とするワクフが21件見られる。また, Qudāma家の Abū 'Umar (d. 607/ 1210) によって建造された Madrasat Abī 'Umar/ al-Marāsa al-'Umariyya は、後にさまざまな人によってワクフが付け加えられたといわれ、それによって Šāliḥiyya 最大のマドラサになったが [DTM: II, 100-112; QG: 248-274; 三浦 1989 b: 三浦 1987: 39-41], MCD からこのマドラサの人気ぶりが知れる。26件のワクフが対象に挙げている。一方, ザンギー朝 Nūraddīn の al-Bimāristān an-Nūri は8件のワクフで言及されているだけである。こうした人気の差が何に由来するのか、よくはわからないが、施設の宗教的性格の違いかもしれない。あるいは, al-Ġāmi' al-Umawī と Madrasat Abī 'Umar の管理がマムルーク朝時代に基本的にウラマーに任されていたのに対し, al-Bimāristān an-Nūri はダマスカス総督の管轄下にあったことが影響していた可能性もある³⁹⁾。もっとも Madrasat

37) オスマン朝がシリアを征服した922年に設定されたワクフもあるが、ほとんどの場合、征服の前か後か不明であるので、ここでは除外し、923/1517年以降のものだけを検討対象にした。

38) マムルーク朝時代のメディナへの関心の高まりについては長谷部 2008 参照。

39) Al-Ġāmi' al-Umawī と al-Bimāristān an-Nūri の管理については Astrid Meier, "waḳf (II. In 7

Abi 'Umar は、マムルーク朝末期には管理人によって私物化されたということなので [三浦 1989 b: 66-67], ワクフの管理人がウラマーか軍人かという点はあまり重要ではなかったとも考えられる。

その他、ハンセン病患者 (ḡaḍmā, sg. aḡdam) を受益者に挙げているワクフが8件ある。このうち1件のみダマスカスのハンセン病患者と明記されているが [MCD: 45 b/ 174], 他もダマスカスまたはシリアにいたハンセン病患者であったと思われる。

ダマスカスのシャリーフ・サイドに対しては2件で計59の物件がワクフにされている [MCD: 107 a-108 b/ 250-252]。なお、このほかにサイド個人が設定したワクフが6件 (うち3件は Kamāladdīn b. 'Izzaddīn b. Ḥamza al-Ḥusaynī という人物による), サイドの所有するミルクが2件 (うち1件は女性) 見られる [MCD: 51 b/ 181-182; 85 a/ 223; 102 b-103 b/ 243-244; 119 b/ 268; 1 a/ 103; 85 a/ 222]。

シリアのマーリク派ウラマーを受益者とするワクフは1件だけだが、41の物件が記録されている [MCD: 33 b-34 a/ 155-156]。Ibn Baṭṭūṭa は、ダマスカスの住民がマグリブの人たちに好意的で、ワクフによる援助を行っていたことを伝えている [大旅行記: I, 283]。マグリブ出身者が大体においてマーリク派であったことを考えると、彼らもこのワクフから利益を得ていたのではないだろうか。

このように、ワクフの対象・目的が設定者自身やその家族・親族をはじめ、宗教・公益施設の維持、特定集団の支援、給食など多岐にわたっていたことをあらためて確認できる。

IV

以上、MCD という、おそらくは936年末/1530年またはそれからほどなくして作成されたと考えられるダマスカス県のワクフとミルクの調査台帳について見てきた。ダマスカス県に関しては、このほかにもいくつかワクフについての情報を含む調査台帳のあることが知られている [BOA: 128-129; Lewis 1951; Mandaville 1969; Bakhit 1982; 永田 1986; 三浦 1995; Winter 2004]。まずはそれらとの比較によって MCD およびそのもととなった調査の性格を明らかにする必要があることはもちろんである。しかし現時点でも次のことはいえるのではないだろうか。

↙ the Arab Lands, 2. In Syria", *EP*, Supplement, 826 a を参照のこと。Madrasat Abi 'Umar の管理人については QG: I, 268-270 参照。なお、al-Ġāmi' al-Umawi のワクフもオスマン朝時代には非課税であったが、Madrasat Abi 'Umar と al-Bimāristān an-Nūri は非課税対象に挙がっていない [Bakhit 1982: 147-148]。したがって、現時点ではこの点が人気の違いの要因であるとは考え難い。ただし、オスマン朝時代に設定されたワクフのうち5件で Madrasat Abi 'Umar が受益者として言及されている [MCD: 59 b/ 193; 64 a-b/ 199; 72 b/ 210; 99 a-b/ 239-240]。

ワクフ財に関して、既に見たように、MCD とほかの叙述史料や碑文とで齟齬がある。また、地誌・地方史に基づいて作成されたリスト [三浦 1995] によれば、44 のマドラサ・学院について、それらのワクフ財がわかるが、そのうち MCD にも挙がっているのは al-Ašraf Mūsā が Šālihiyya に建設したハディース学院、Sitt aš-Šām が建設させた al-Madrasa aš-Šāmiyya、Baraka Ḥān の建設した al-Madrasa aḡ-Zāhiriyya のほか Nūraddīn の al-Madrasa al-Ādiliyya al-kubrā [DTM: I, 359-367; MCD: 1 a/ 103] の計 4 つだけしかない。さらに、先に触れた通り、アイユーブ家やマムルーク朝アミールの Tankiz などが建造した施設の多くも MCD に記載されていない。これらのことからすると、MCD 作成時までに多くのワクフ財が失われ、ワクフ対象施設も荒廃してしまっていたと考えられるとはいえ [Bakhit 1982: 138]、MCD のもとになった調査自体が土地を中心になされ、また網羅的・徹底的なものではなかったように思われる。ともあれ、MCD には他史料にはない情報が見られるものの、当初ワクフやミルクとされた物件がすべて挙げられているわけではないこと、またある時点でのワクフやミルクの状況が必ずしも正確に記録されていない可能性があることには注意が必要であろう⁴⁰⁾。

MCD の内容からは、とりあえず次の 4 点を指摘できるのではないかと思う。

第一に、エジプトと比べダマスカスでは土地の私有化——ミルクとして保持しているか、ワクフにしているかに関わらず——が早くから進んでいたらしいということである⁴¹⁾。

第二は、女性のワクフ設定者に関してである。MCD でのワクフ設定件数における女性の割合は、地誌・地方史を分析して得られたマドラサ・学院創設者における女性の割合の結果 (11.2%) と一致する [三浦 1995: 30]。ただし、オスマン朝支配期に設定されたワクフ 39 件のうち 8 件 (20.5%) が女性のものであるため、女性によって設定されたワクフは長続きにくいということなのかもしれない。だが、それでも 20% 程度という割合からすると、ダマスカスの女性はあまり私財を持たず——ミルク所有者における女性の割合は 7% と低く、オスマン朝支配期でもほぼ同様である——、ワクフ設定にもそれほど熱心ではなかったと考えることもできる。しかしながら、MCD に記録されているワクフ財やミルク財の多くが農業関係資産なので、都市内不動産を加えれば女性の割合が大きくなる可能性は高い⁴²⁾。したがって、ダマスカスでは農業関係資産も多くの女性が所有していたと考

40) *Tahrir defter* の内容が必ずしも信頼できるわけではないことについては、例えば Orbay 2007: 6 を参照。

41) Lewis 1979: 116; Frenkel 2001: 200-202 参照。なお、Cuno は、ダマスカスではオスマン朝支配時代に都市住民によって次第に多くの土地が獲得されたとしているが [Cuno 1995: 149-151]、アイユーブ朝時代に既に村や枝村などがしばしばワクフにされていることからしても、土地の私有化は早くから進んでいたと考えられる。

42) 女性設定者のワクフ財が主に都市内不動産、特に住宅であったことについては例えば、林 1992: 253; Meriwether 1997: 134; Fay 1997: 34-40 を参照のこと。

えるべきかもしれない。また、女性ワクフ設定者の大部分を軍人の親族や家族が占めたと従来いわれてきたが [三浦 1995; Humphreys 1994], MCD を見る限り、大規模なワクフはともかく、全体としては、その他の多くの女性もワクフ設定に関与していたように思われる。

第三に、古いミルクが登録されていることや al-Furfūr 家の事例から、必ずしもすべての資産がワクフにされるわけではなかったといえるであろう。財産の保護や継承といった経済的理由がワクフ設定において占めた意味についてさらに検討する必要があるのではないだろうか。

第四に、これも既に指摘されていることだが⁴³⁾、ダマスクスではワクフ対象の多くがダマスクスとその近郊のものであった、いわば地産地消の傾向が強かったということである。しかし、ハラマインは例外で、遠く離れていても多くのワクフが対象・目的として挙げていた。このうち実際にどれほどが両聖都のワクフに組み込まれたのか現時点ではわからないが、オスマン朝支配下の 16 世紀には主に地元民からそのための管理人が任命されたというので [Bakhit 1982: 137], その財源はかなりの規模であったと考えられる。

これらの点についても、他の調査台帳をはじめとするオスマン朝時代の史料を開拓、分析することによって検証していくことが今後の課題である。

[付記] 本稿は 2008 年（平成 20 年）度昭和報公会学術研究助成金による成果の一部であり、同年度東洋史研究会大会（11 月 3 日京都大学）における口頭発表をもとにしている。

参 考 文 献

- AH: Ibn Šaddād (d. 684/ 1285), *al-A'lāq al-ḥaṭira fī ḍikr umarā' aš-Šām wal-Ġazira: Ta'riḥ madīnat Dimašq*, ed. Sāmi Dahhān, Damascus, 1956.
- AMF: *Awqāf wa-amlāk al-muslimīn fī Filasṭīn/ The Muslim Pious Foundations and Real Estates in Palestine*, ed. Mehmet İpşirli/ Mohammed D. al-Tamimi, Istanbul, 1982.
- DL: as-Saḥāwī (d. 902/ 1497), *ad-Daw' al-lāmi' li-aḥl al-qarn at-tāsi'*, 12 vols., Bayrut, n. d.
- DMZ: al-Yunīnī (d. 726/ 1326), *Ḍayl Mir'āt az-zamān*, 4 vols., Hyderabad.
- DTM: an-Nu'aymī (d. 927/ 1521), *ad-Dāris fī ta'riḥ al-madāris*, ed. Ġa'far al-Ḥasanī, 2 vols., Damascus, 1948 - 51 (rep. 1988).
- FS: Taqīaddīn as-Subkī (d. 756/ 1355), *Fatāwā s-Subkī*, 2 vols., Cairo, 1936 - 37.
- IW: Ibn Ṭūlūn (d. 953/ 1546), *I'lām al-warā bi-man wullīya nā'iban min al-atrāk bi-Dimašq aš-Šām al-kubrā*, ed. Muḥammad Aḥmad Duhmān, Damascus, 1964.

43) 三浦 1995 参照。またエルサレムやアレppoでも同様であった [三浦 2004; 谷口 2007]。

- MCD: *Mısır Vakıfları (Osmanlı Devri ve Öncesi)*, ed. Aydın Özkan, Istanbul, 2005.
- MH: Ibn ʿUlūn, *Mufākahat al-ḥillān fī ḥawādiṯ az-zamān*, ed. Muḥammad Muṣṭafā, 2 vols., Cairo, 1962 – 64.
- QG: Ibn ʿUlūn, *al-Qalā'id al-ḡawhariyya fī ta'riḥ aṣ-Ṣāliḥiyya*, ed. Muḥammad Aḥmad Duhmān, 2 vols., Damascus, 1980 – 81 (2nd ed.).
- RCEA: *Répertoire chronologique d'épigraphie arabe*, Cairo, 1931 –
- SAQ: *Siḡill arāḍi liwā' al-Quds*, ed. Muḥammad 'Īsā Ṣāliḥiyya, Amman, 2000.
- TKW: Ibn aṣ-Ṣuqā'i (d. 726/1326), *Tāli Kitāb al-Wafayāt al-a'yān*, ed. J. Sublet, Damascus, 1974.
- TMZ: Ibn Ṣaddād, *Ta'riḥ al-Malik az-Zāhir/ Die Geschichte des Sultans Baibars*, ed. Ahmad Hutait (Aḥmad Ḥuṭayṭ), Bayrut, 1983.
- WMT: *Waṭā'iḡ muqaddasiyya ta'riḥiyya*, ed. Kāmil Ġāmil al-'Asalī, 3 vols., Amman, 1983 – 89.
- ZK: Baybars al-Manṣūrī (d. 725/1325), *Zubdat al-fikra fī ta'riḥ al-ḥiḡra*, ed. D. S. Richards, Bayrut, 1998.
- 大旅行記: イブン・バットゥータ著, イブン・ジュザイイ編, 家島彦一訳注『大旅行記』全8巻, 平凡社(東洋文庫), 1996 – 2002.
- Bakhit, Muhammad Adnan (1982) *The Ottoman Province of Damascus in the Sixteenth Century*, Bayrut.
- Bakhit, Muhammad Adnan (1990) Ṣafad et sa région d'après des documents de waqfs et des titres de propriété 1378 – 1556. *Revue du Monde Musulman et de al Méditerranée* 55/ 56, 101 – 123.
- Bakhit, Muhammad Adnan (1994) Awqaf during the Late Mamluk Period and the Early Ottoman Times in Palestine and Jordan. In: *The Proceedings of the 2nd International Conference on Urbanism in Islam (ICUIT II) Nov. 27–29, 1990*, Tokyo, 185 – 203.
- BOA: *Başbakanlık Osmanlı Arşivi rehberi*, 2nd ed., Istanbul, 2000.
- Burgoyne, Michael H./ Richards, Donald S. (1987) *Mamluk Jerusalem: An Architectural Study*, London.
- Cuno, Kenneth M. (1995) Was the Land of Ottoman Syria *Miri* or *Milk*? An Examination of Juridical Differences within the Hanafi School. *SI* 81, 121 – 152.
- Fay, Mary Ann (1997) Women and *Waqf*: Property, Power, and the Domain of Gender in Eighteenth-Century Egypt. In: Zilfi, Madeline C. (ed.) *Women in the Ottoman Empire: Middle Eastern Women in the Early Modern Era*, Leiden/New York/Köln, 28 – 47.
- Frenkel, Yehoshua (2001) Agriculture, Land-tenure and Peasants in Palestine during the Mamluk Period. In: Vermeulen, U./J. Van Steenbergen (eds.) *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras III*, Leuven, 193 – 208.
- Frenkel, Yehoshua (2009) *Awqāf* in Mamluk Bilād al-Shām. *Mamlūk Studies Review* 13 (1),

149 – 166.

- Garcin, Jean-Claude (1990) Quelques questions sur l'évolution de l'habitat médiéval dans les pays musulmans de Méditerranée. In : *L'habitat traditionnel dans les pays musulmans autour de la Méditerranée*, 3 vols, Cairo, 1988 – 91, vol. 2, 369 – 385
- Humphreys, R. Stephan (1977) *From Saladin to the Mongols: The Ayyubids of Damascus, 1193–1260*, Albany.
- Humphreys, R. Stephan (1994) Women as Patrons of Religious Architecture in Ayyubid Damascus. *Muqarnas* 11, 35 – 54.
- Hütteroth, Wolf-Dieter/Abdulfattah, Kamal (1977) *Historical Geography of Palestine, Transjordan and Southern Syria in the Late 16th Century*, Erlangen.
- Layish, Aharon (2008) *Waqfs of Awlād al-Nās in Aleppo in the Late Mamlūk Period as Reflected in a Family Archive*. *JESHO* 51 (2), 287 – 326.
- Leiser, Gary (1984) The Endowment of the al-Zahiriyya in Damascus. *JESHO* 27 (1), 33 – 55.
- Lewis, Bernard (1951) The Ottoman Archives as a Source for the History of the Arab Lands. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 139 – 155.
- Lewis, Bernard (1979) Ottoman Land Tenure and Taxation in Syria, *SI* 50, 109 – 124.
- Little, Donald (1984) *A Catalogue of the Islamic Documents from al-Ḥaram aš-Šarīf in Jerusalem*, Bayrut.
- Lufti, Huda (1985) *al-Quds al-Mamlūkiyya*, Berlin
- Mandaville, Jon Elliott (1969) *The Muslim Judiciary of Damascus in the Late Mamluk Period*, Ph. D. Diss., Princeton University.
- Meriwether, Margaret L. (1997) Women and *Waqf* Revisited: The Case of Aleppo, 1770 – 1840. In: Zilfi, Madeline C. (ed.) *Women in the Ottoman Empire: Middle Eastern Women in the Early Modern Era*, Leiden/New York/Köln, 128 – 152.
- Müller, Christian (2008) A Legal Instrument in the Service of People and Institutions, *Mamlūk Studies Review* 12 (1), 173 – 191.
- Orbay, Kayhan (2007) Structure and Content of the *Waqf*-Account Books as Sources for Ottoman Economic and Institutional History. *Turcica* 39, 3 – 47.
- Richards, D. S. (1990) A Damascus Scroll Relating to a *Waqf* for the Yūnusiyya. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 267 – 281.
- Richards, D. S. (2002) Primary Education under the Mamlūks. In: Dévényi, K. (ed.) *Proceedings of the 20th Congress of the Union Européenne des Arabisants et Islamisants, Part One*, Budapest, 223 – 232.
- Saghbini, Souad (2005) *Mamlukische Urkunden aus Aleppo*, Hildesheim/Zürich/New York.
- Salati, Marco (1994) Un documento di epoca mameluca sul *waqf* di 'Izz al Dīn Abū l-Makārim, Ḥamza b. Zuhra al-Ḥusaynī al-Ishāqī al-Ḥalabī (ca. 707/1307). *Annali di*

- Ca' Foscari* 33 (3), 97-137
- Walker, Bethany J. (2007) Sowing the Seeds of Rural Decline?: Agriculture as an Economic Barometer for Late Mamluk Jordan. *Mamlūk Studies Review* 11 (1), 173-199.
- Winter, Michael (2004) Mamluks and Their Households in Late Mamluk Damascus: A Waqf Study. In: Winter, Michael/Levanoni, Amalia (eds.) *The Mamluks in Egyptian and Syrian Politics and Society*, Leiden/Boston, 297-316.
- 五十嵐大介 (2004) 後期マムルーク朝スルタンの私財とワクフ —— バルクークの事例 —— 『オリエント』 47 (2), 20-45.
- 菊池忠純 (1988) ワクフに関する最近の研究についての覚え書き 『オリエント』 31 (1), 183-198.
- 近藤信彰 (2001) マヌーチェフル・ハーンの資産とワクフ 『東洋史研究』 60 (1), 1-33 (242-210).
- 今野 毅 (2007) オスマン朝における検地帳の作成過程に関する考察 —— 1520年代アルバニア中部・南部に関わる史料群の分析から —— 『北大史学』 47, 1-32.
- 谷口淳一 (2005) 12-15世紀アレppoのイスラーム宗教施設 『西南アジア研究』 62, 66-98.
- 谷口淳一 (2007) マムルーク朝時代のアレppoにおけるイスラーム宗教施設 『東洋史研究』 66 (1), 28-62 (133-99).
- 永田雄三 (1986) オスマン朝時代のシリア史に関する若干の覚書 『アジア・アフリカ言語文化研究』 32, 211-230.
- 長谷部史彦 (2007) マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル 今谷明 (編) 『王権と都市』 思文閣出版, 209-245.
- 林佳世子 (1992) 「16世紀イスタンブルの住宅ワクフ」 『東京大学東洋文化研究所紀要』 118, 237-262.
- 三浦 徹 (1987) ダマスクス郊外の都市形成 —— 12-16世紀のサーリヒーヤ —— 『東洋学報』 68 (1), 029-062.
- 三浦 徹 (1989 a) マムルーク朝末期の都市社会 —— ダマスクスを中心に —— 『史学雑誌』 98 (1), 1-47.
- 三浦 徹 (1989 b) マムルーク朝時代のサーリヒーヤ —— 街区とウラマー社会 —— 『日本中東学会年報』 4 (1), 44-84.
- 三浦 徹 (1995) ダマスクスのマドラサとワクフ 『上智アジア学』 13, 21-62.
- 三浦 徹 (2004) 中世エルサレムにおける救貧 長谷部史彦 (編著) 『中世環地中海圏都市の救貧』 慶應義塾大学出版会, 127-181.

(神戸大学大学院人文学研究科)